

14.5-139

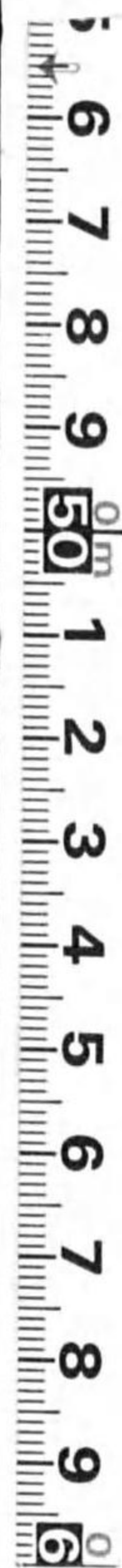


1209501214601

14.5

139

東京帝室博物館講演集 第二冊



始





東京帝室博物館講演集

第二册

孔子の像に就いて

工學博士 塚本 靖

傳教大師と弘法大師

文學博士 辻 善之助





東京帝室博物館講演集

發行所寄贈本

第二册





14.5-137

目次

孔子の像に就いて……………工學博士 塚本 靖一

傳教大師と弘法大師……………文學博士 辻 善之助

本冊は昭和八年四月十五日東京美術學校講堂に於て開催せし本館講演會の速記録なり



# 孔子の像に就いて

工學博士 塚本 靖



私は大正九年十月に日本美術協會の依頼で同じ演題の下に講演を致したことがございます。それは美術協會の雑誌に出ましたが、それを又その後書畫骨董雜誌に轉載いたしました。爾來別に新しい研究をした譯でもありません、同じやうなことを言ふのであります。たゞし當時は重に畫家彫刻家の參考になるやうな風に御話を致しました。今日は一般の人に對して、これを述べやうと思ひますから、其間に多少の相違はあるだらうと思ひます。

私は先年支那へ二回ばかり参りました、各々約半年位支那内地を旅行いたしました。その節山東省曲阜その他の地に於て孔子像を見ましたが、それ等に就いて説明し、尙日本に於ける孔子の像は何を據り所にして居るかと思ふことも述べたいと思ひます。詳細のことは時間の關係上申上げることが出来なだらうと思ひますから、その概要を述べることと致します。

孔子の像に就いて述べるに先立つて、孔子のことを書いた書物に就いて一應申します



と、誰もよく知つて居るのは論語で、是は孔子の生活状態を研究するには最も宜い本であります。此本は孔子の時代を去ること遠からざる時分に、門人共が孔子の言動を書いたと云ふことになつて居るから、孔子のことを知るには一番確かな書物であります。その次は史記で、此書は御承知の通り漢の司馬遷の作つたものでありますから、孔子の年代を去ること四百餘年、即ち随分後のものであり、其記事には種々説があつて、文章は大變立派なものだが、可なりどうかと思ふやうなことも載つて居る。併し史記の記載を覆すやうな確かなものが出ない以上は、これは支那の二十四史の一番初めに置かれて居るもので、所謂支那の正史であるから、其記事は一つの有力なる史料と見なければならぬ。この他には孔子のことを知るに頼りになるものはない。漢魏叢書の中に「孔叢子」と云ふ書物があるが、これは孔子九代の孫孔鮒が作つたものだと言ふ。しかし是は偽書であると云ふ説がある。又「孔子家語」と云ふ書物も亦學者の間には偽書であると云ふことになつて居る。併ながら偽書であるにも拘らず、種々なものには孔子家語などが引用されて居る。兎に角孔叢子及孔子家語などは偽書であるとしても、その作られた時代に於て孔子に就いて斯う云ふ傳説があつたと云ふことだけは分るので、其點から見て、其記載が一つの参考となるのであります。それから後になつて、明の嘉靖年間の人で、孔子三十六代の孫真叢と云ふ人が著した「闕里志」と云ふ本があります。これは孔子が生れ、生活して居つた

魯の闕里の名をとつたのであつて、闕里は今の山東省曲阜縣のことで、この本は割合によく孔子のことを調べて居る。

先づ此等の書物に頼つて孔子の容貌を想像して見ますと、大體から見て孔子は大男であつて小男ではなかつたことが想像される。このことはどの書物にも一致して居る。孔子の父の叔梁紇と云ふ人はどうであつたかと云ふと、孔子家語の卷九を見ると、叔梁紇は大男で且つ勇氣のあつた人のやうである。身の長十尺、武力絶倫と出て居る。猶この人は頗る強壯な人であつたと見え、六十六歳の時に妻を失つて、後妻の顔氏を娶り、孔子を生むと云ふから随分強壯な人であつたやうであります。さて孔子はどうであつたかと云ふと、史記には「身長九尺六寸、人皆謂之長身而異之」とあり、その外の書物を見ましても、或は十尺と云ひ九尺六寸と言つて居るが、身長の高いのは遺傳的であつたらしい。この十尺と云ひ九尺六寸と申すのは、周の尺度であつて、周の尺度に就いては後の學者の研究により、今日に於て一般に認められて居るものによると、周時代の一尺は日本曲尺の六寸四分位であるから、周尺の九尺六寸は今の日本尺の六尺一寸位に當る。人皆長身と稱して異となすにあつて見れば、餘り不思議な寸法ではないのである。背の高いのは聖人の容貌の特徴であるかと云ふと、支那ではさう認めて居つたやうで、「宛委餘篇」と云ふ書物には斯んなことが出て居る。



中國之人長一丈者、人君則黃帝、堯、禹、文王、人臣則吳、伍員、漢、巨毋霸、俱十尺、母霸眉間一尺、元魏南明太守慕容叱頭長一丈、圍九尺、禹短一寸

どうも是等の記事で見ると、名君偉人は共に背が高いやうである。日本では「大男總身に智慧が廻りかね」と言ふ川柳があるが支那では是と反對であつたやうであります。其他「論語演義」と云ふ書の註には斯う云ふことがある。孔子が蔡の國へ行つて宿屋に泊つた時、盜賊がその宿屋に入つて孔子の履を片方盗んで行つた。ところが履を片方盗んでも致し方がないのでその履を捨てた。然るにその履を見ると長さ一尺四寸あつて凡人の履とは違つて居ると記してある。この寸法を日本の尺度に直すと八寸九分六厘になる。私の足は足袋で十文半で、八寸位はあり、靴は九寸二分ありますから、孔子の履より大きいやうであります。今の靴の先には空所があるし、孔子の時代の履の形と製作も違ひませうから、これは問題になりませぬ。足一ぱいに作つて九寸と云ふと大分大きな足であります。これ等の點から見ても孔子は長身な方であつたことが想像される。

その次は孔子は瘦せた人であつたか肥えた人であつたかと云ふ問題であります。先づ史記の記載を見ると

孔子適鄭、與弟子相失、孔子獨立郭東門、鄭人或謂子貢曰、東門有人、其頰似堯、其項類臯陶、其肩類子產、然自要以下不及禹三寸、繫々若喪家之狗、

とある。孔子がそれを聞いて、外の所は及ばぬけれども、喪家の狗は似たる哉と言つて居る。さうかと思ふと、闕里志には孔子の腰は十圍とあるから、これは喪家の狗どころではない。論語には「子温而厲、威而不猛、恭而安」、これは性質の説明で容貌のことではありませぬが、一般から見れば温和なと云ふのは、瘦せかけた犬、養木堂のやうな人ではなく、多少肥満の傾向があるやうである。孔子の像は幾つもありますが大抵はどちらかと云ふと肥満の方に現されて居ります。さうすると喪家の狗と云ふ形容は出鱈目のやうになります。これが私の考では一時的の有様であつたと想像する。孔子は方々歩き巡られた。誰でも旅行をすると飲食が異り、生活状態の變化と労働の増加する爲に、所謂旅行疲れで瘦せるのであります。現に私も支那を旅行した時には随分瘦せました。宛も喪家の狗の如しであつたかも知れませぬ。孔子も鄭に赴かれた頃は如上の状態で、加ふるに隨行の弟子と相失し、精神的にも苦勞されたから、瘦せて居られたものと思ふ。孔子はその後のことではありますが、陳蔡の野に包圍された時には、火食せざること七日、即ち七日間煮たものを食はなかつたのであります。私の支那を旅行した頃にもどうかすると一日中満足な食を得られないやうなこともあつて、體重が大いに減じました。さればこの時は一時的の現象として瘦せられたのではないかと思ふ。それで普通の孔子の姿は一般の人より背が高く、少しく肥つた人であつたと考へて見たい。



それから猶容貌に就いて書いたものを見ますと、「上長下迫」と云ひ、又「修上而趨下」とある。莊子に「老萊子出でて薪す、先聖に遇ふ、反つて以て告げて曰く、此に人あり、上長く、下迫り、少しくかがみ、耳は後に在り云云」と記してある。即ち體の上部が長く、下部が短かく、猫脊で、耳が後ろの方にあると云ふのですから、餘り好い格好ではなく、すらりとした人ではなかつたらしい。

支那人は一般に偉い人は常人とは異相であると考へて居る。闕里志にも聖人は常人とは違ふ所があり、孔子には四十九の異つた點があると記して

先聖生而有異質、凡四十九表、反首、注面、月角、日準、河目、海口、龍額、平唇、昌顏、均頤、輔喉、駢齒、龍形、龜脊、虎掌、胼脇、修肱、泰膺、圩頂、山臍、林脊、翼臂、注頭、卓腴、堤眉、地足、谷窳、雷聲、澤腹、修上、趨下、末僕、後耳、面如蒙、供、手垂過膝、耳垂珠庭、眉一十二彩、目六十四理、立如鳳、跣、坐如龍、躡、手握天文、足履度、宇、望之如什、就之如舛、視如營四海、躬屣謙讓、胸有文曰、制作定世符、身長九尺六寸、腰大十圍

四十九表と云ふのは斯う云ふやうに、河のやうな目、龍の顔、虎の掌、山の如き臍、林の如き背、立てば鳳凰、坐れば龍などと大袈裟な形容をして居るが、具體的にその姿は想像し難いのであります。唯口が大きく、齒ならびがよく、猫脊で、頭の頂が窪み、上が長く、下短く、耳が後にあつて、手が長く、肥満長大の人だと云ふことだけは想像されるのであります。この

圩頂と云ふことに就いては、この書の外に史記の孔子世家に

生而首上圩頂、故因名曰丘

とあります。之を索隱の注で見ますと、圩頂と云ふのは中低くして四傍高しとある。即ち頭の頂きが窪んで居つて周圍が高くなつて居る。ちようど法然上人繪傳に見る上人の頭のやうなもので、是は叔梁紇が尼丘山に禱つて孔子を生んだが、尼丘山の形が斯様な形であり、それに感じて斯様な形であつたと考へ、又孔子の名を丘と名けたとあります。が、後世になると、このことが非常に誇大されまして、頭の窪みに水一升二合を受くる程だと書いてある本がある。支那の樹と日本の樹では違つて居るが、それにしても、これでは丸で河童の頭のやうなものである。随分思ひ切つた形容であります。實際は多少頭の頂が窪んで居つたのでありませう。龍鳳、鳳山、林、日、月、河などの形容に至つては、どうも想像が附かない。又史記に頰が堯に似、頂が臯陶に似、肩が子産に似て居ると云ひ、唐の劉禹錫は孔子の形を堯頭禹耳と形容して居るが、是は古代の名君賢臣に似て居ると云ふだけで、孔子の容貌を想像する材料にはならないのであります。又一方に史記に「孔子狀類陽虎」とあるが、陽虎と云ふのは随分亂暴な人でありまして、その容貌に就いての記載はありませぬが、善人ではないのですから、優美温雅なものではなかつたらしい。孔子が之に似て居ると云へば、其容貌は温和なものでないやうにも想像される。それで今假りに孔子の



像を作るとすれば、是等の記事に拘泥する必要はない。勿論理想的な聖人が出来れば宜しいのであります。文献の上からは以上述べた事以外には具體的のことは分らないのであります。

それから次に孔子の畫像及び彫刻像の問題に入ります。孔子の畫像を作つた記事は後漢の靈帝の光和二年に始置鴻都門學畫先聖及七十二弟子像とあるのが記録の一番古いもののやうである。所が實物の方には却つてもつと古いものがあつて、山東省の兗州府濟寧州の孔子廟にある孔子老子を見るの圖と云ふのは後漢の桓帝の建和元年頃に出來て居るもので、此記事よりも三十二年程前のものと思はれる。其圖は極く簡單なもので、肩の所に「孔子也」と書いてあるから、是が孔子像であることは疑ひなきものです。又羅振玉氏の有つて居られるものに「孔子磬を撃つ圖」と云ふものがあります。是は孔子が磬を九つ並べて之を撃つ形で、孔子老子を見るの圖と同じ書き方で、年代も略々近いものと想像される。是等が先づ一番古い孔子像である。次に佩文齋書譜を見ますと

晉張收太康中人畫仲尼七十二弟子

とあるが、是は今申しました年代よりは約百年程後に存ります。猶同書には晉の有名な畫家顧愷之が榮啓期及夫子を畫くと載せてある。是は榮啓期と孔子の問答の圖で、この圖は支那人の好むものと見えて、唐の時代になりますと、鏡の裏の圖柄などにも現れて居

ります。その次には戴逵即ち戴安道に孔子弟子の圖があり、宋の陸探微が孔子十弟子を畫き、宗炳は孔子及弟子の像、劉瓛は仲尼十哲を畫くとあります。又梁の張僧繇も孔子十哲を畫いたと云ふことです。即六朝時代の名畫家と云ふものは皆孔子の像を畫いて居り、唐の時代に入ると、王維、吳道子等唐代屈指の名畫家が孔子の像を畫き、宋には李龍眠の孔子及七十二賢の圖がある。吳道子及李龍眠の孔子像は後世の孔子の像の元となつたらしく、現存のものは寫しを重ねて大分崩れて居る様に思はれる。

彫刻の孔子像は、東魏の孝靜帝の興和三年、今から千三百七十九年前に、兗州の刺史李瑋が初めて聖像を建て、十子を彫琢して之を曲阜の孔子廟に置くと、闕里志に見えて居るのが一番古いのであります。併し又一方には又前からあつたやうな記録もある。水經注を見ると

夫子在西門東向、顏母在中間南面

とあるのを見ると、此像は畫幅と云ふよりは彫刻であつたやうに思へる。この水經注は興和三年よりは前に出來た書であるから、興和年間に始めて孔子の像を作つたと云ふことが怪しくなつて來る。そのみならず、武梁祠の石刻を見ますと、先祖の像を立體に作つて、子孫の者が之に供物をして居る形が現されて居ります。後漢の時代既に斯様な風俗があつたとすれば、曲阜の孔子廟に孔子の彫像があつたと云ふことが考へられる。又



世界一般から見ましても、畫像よりも彫刻像の方が先に出来るのが普通でありますから、孔子廟の最初の孔子の像は六朝より前のことではないかと考へられます。

次に日本に於ける孔子の像に就いて見ると、文武天皇の大寶元年に始めて釋奠を行ふたが、此時分に孔子の像があつたともなかつたとも記事はありませぬ。その後になると吉備眞備、唐より弘文館の畫像を得て歸り、之を太宰府の學業院に安置し、又百濟の畫師をして之を寫さしめて、大學寮に置けりと江家次第に見え、元慶四年巨勢金岡をして孔廟先聖先師の像を畫かしむと云ふ記事がある。是等が古い記録であり、何れも畫像であります。彫刻に就いては、藤澤南岳氏の先聖像記に、舊高松藩學館に在つた孔子像は伽羅で造つてあつて、長九寸、野相公即小野篁が刻したものだと言はれるとある。小野篁は學者であり、足利學校の創立者だと言つて、同學校の現在の孔子の像とも結着けて考へられて居る人でありませぬけれども、何れも信用すべきものはありませぬ。その後、大學寮に釋奠をしたと云ふことは、書物では屢見えて居り、高倉天皇の安元三年には大學寮が焼け、その年の八月には太政官廳で釋奠をしたと云ふ事が出て居る。鎌倉時代に入つては、百練抄に建曆二年三月五日、自内裏、被渡大學、孔子御影爲書寫也

と云ふことがあるから、古代から孔子の像を畫いたことが分る。黒川眞頼博士の考古畫譜に依ると、この外に土佐邦隆筆の孔子像一幀、東大寺寶物目錄に粟田口法眼隆光筆の孔

子像があり、帝室博物館にあるのが東大寺にあつたものではなからうかと附加へてあります。同書に孔子の像には袞冕、大司寇、几座、連行の四種あるが、日本の大學寮にあつたものは果して此四種の内のどれであるのか譯らぬと云ふことが書いてある。支那にはこの四種類の像が今現に残つて居り、其外に乘駱圖即馬車に乗つて居る孔子像、その他二三



帝室博物館藏孔子像

のものがあ  
ります。今  
その大體の  
説明を致し  
ます。  
先づ古い  
所から見  
ると、孔子老子

を見るの圖、是は今から百七十七年前、乾隆五十一年、我天明六年に錢唐の黃易と云ふ人が山東省嘉祥縣の武宅山で之を得て、濟寧州の孔子廟に納めたもので、所謂孔子適周、問禮於老子、光景で、史記に依ると、魯の南宮敬叔と云ふ弟子が孔子と共に周に行つたとあります。魯南宮敬叔言魯君曰、請與孔子適周、魯君與之一乘車、兩馬、一豎子、俱適周、問禮、蓋見老子云、



この圖で見ますと、老子は自然木のやうな曲つた杖をつき、孔子は鳥を捧げて老子に對して居る。周禮に依ると、大夫は雁士は雉を執るとありますから、この時分は孔子はまだ大夫でありませぬので、この鳥は雉でなければならぬと云ふことになりませんが、但しは雁である



山東省濟寧州文廟孔子石藏老子孔子之圖

と云ふ説もあります。それから孔子の後ろに人が一人立つて居りますが、未だ冠せざる者でありまして、是は史記にある豎子で、魯の君が馬二匹と車と子供を與へたとある所の子供で、その後ろに二頭立ての馬車があつて、人が一人乗つて居るが、これは南宮敬叔でありませう。此時孔子が幾つ位の時

であるか、莊子には、年五十一、南見老聃とあるが、史記の註に依ると、未だ三十ならずとあり、或る書物には二十五とある。二十五と三十未滿は宜しいとしても、五十一と云ふのは大分違つて居る。支那人は面白い癖があつて、少し疑しいやうな數を非常に正確に書く。一體孔子は早熟の人であつたか、晩成の人であつたかと云ふに、大器晩成のやうに思はれるが、實は早熟の人であり、子供の時分から非常に俊才であつたやうであります。史記に孔子爲兒嬉戲、常陳俎豆設禮容、とありますから、普通の子供のやうに、ヨロヨロなんぞ遊ぶ子供ではなく、餘程こまちやく

とありますから、普通の子供のやうに、ヨロヨロなんぞ遊ぶ子供ではなく、餘程こまちやくれて居る氣味がある。又季氏が魯の文學の士、即ち學識のある人を集めて御馳走をした時に、孔子は年十五の少年であつたが、あの人は出来るからと云ふので招待されたので、陽虎が之を嘲つたことが史記にあります。

季氏饗士、孔子與往、陽虎絀曰、季士饗士、非敢饗子也

之を見ても孔子は神童と言はれる方の人であつたらしい。十五位で堂々たる學者などと一緒に招きを受けて居るのであります。闕里志を見ますと、景王の十三年、歳二十にして初めて魯に仕へ、二十二にして初めて弟子を取つて教へまして、顔淵の父顔路などはその時の弟子であつたとあります。



斯う云ふ風に種々の記録などから考へますと、孔子老子を見るの圖は、孔子が二十五六才の頃が適當と思はれる。この像を見ますと、老子は老人であるから、天然木の杖をついで腰が曲つて居るが、孔子が曲つて居るのは彼の龜脊即猫背の人であり、又老子に對し敬意を表した姿勢であるからでありませう。石案に出て居る孔子の圖には、口の邊りに三本ばかりの髯があります。實際の石では剝落して明瞭でありませぬで、之は見えぬ様です。彼是考へますと、この圖は二十五六歳と見た方が宜しいやうであります。

孔子磬を撃つ圖。羅振玉氏のもの。孔子が磬を九つ並べて之を撃つ形であります。今日朝鮮の古樂を見ると、磬を澤山集めて撃ちますが、丁度是と同じものやうである。この圖には孔子の前後に二人づつ人間が現はされてありますが、上に「孔子」と明記してある所を見ると、是は孔子には違ひないが、孔子の傳の中のどの部分を圖したのか明瞭でありませぬけれども、史記にある

孔子擊磬、有荷蕢而過門者、曰有心哉擊磬乎、雖々乎莫己知也、夫而已矣。

この光景を畫いたものかと想像されるのであります。以上二圖は後漢末のものでありまして、現に「孔子老子を見るの圖」は黃易が山東嘉祥縣の武宅山で之を得て、濟寧州學に納めたと云ふのであります。武宅山は有名な武梁祠の石室のある所であり、尙種々の考證もあり、疑ひもなき後漢末のものであります。「孔子磬

を撃つ圖」もその繪の形等此の石室のものと同じであり、略々同年代と推測すべきものと思はれるのである。この二つが支那で一番

古い孔子像と認められるもので、即今より約千七百餘年前のものである。



山西文水縣文廟藏石像行教像

次に黒川博士の書かれた「連行の像」は多分支那で言ふ「行教の像」と云ふのがそれではないかと思ひます。此圖は又孔子小影とも稱し、孔子四十七代の孫孔傳の説に依ると、唐の王維即ち王摩詰の筆であると言ひ、元の時代の鄒縣の尹司居敬の説に依ると、願愷之の筆だと云ふ。清の聖祖が孔子廟に來られて、孔毓圻に孔子像の事を聞かれた時に、この圖は端木子即ち孔子十哲中の子貢の寫したもので、更にそれを願愷之が重摸したものであると言つて居るが、是が孔子像中一番眞に迫つ

たものであると傳つて居ります。孔子の像に就いて



孔傳云家廟所藏衣燕居服顔子從行謂之小影於像最眞。



山東曲阜縣至聖廟藏石像行教像

信ぜられて居るのは十二年前に死んだと云ふ説であります。さうすると、先づ孔子が六十一二歳の頃に顔淵が死んだと假定すれば、顔淵は孔子より三十歳若いから、死んだ時は三

年前に死んだとあるが、一般に  
ると、孔子は顔淵を最も愛して居  
られたのですから、孔子が顔子を  
伴ふて居ると云ふだけは略信じ  
て宜しいと思ふが、其判然した時  
代は分らない。孔子の亡くなつ  
たのは七十二歳、一説には七十三  
歳又七十四歳となつて居る。顔  
子は孔子に先達つて死んだが、闕  
里志を見ると、其死は孔子の死に  
先つこと十二年とある。但之に  
も異説があつて或る書物には二

十一二と云ふことになる。尚顔淵は傳記に依ると、年二十九にして髪が悉く白いとあり  
ますから、今日この繪を作るとすれば、孔子の歳を六十位にして、顔淵を三十位にして、その  
髪は白く書くと云ふことが繪を畫く人の參考になる譯であります。



杭州府文廟孔子七十二子像中孔子坐像(李龍眠筆)

縣の孔子廟に移され、更に杭州の廟に移された。この拓本は即ち明代重刻の拓本であり  
ます。此圖は右の通り李龍眠の筆だと稱せられるが、一説に依ると、吳道子にこの圖があ  
り、李龍眠はそれを寫したのだとも傳へられて居る。圖は御覽になるやうに、眼象の裝飾



ある禮盤のやうなものの上に孔子が坐して、手に如意を持つて居りますが、是は明かに佛  
教渡來後の手法と思はれるもので、考證の上からは面白いものではないと思ひます。我  
國の足利學校にある孔子像も、右の手に何か持つて居るが、如意では困るとても考へて、取



山東曲阜縣至聖廟孔子像

稱せられて居る孔子凭几圖と稱するものがあります。大分石が磨滅して居りますが、孔  
子は、獸足の曲衆に片脰を懸け、右手に如意を持ち、一人後ろから傘をさし掛けて居る。是  
は孔子四十七代の孫孔傳の説に

り去つて  
仕舞つた  
のではな  
いかと思  
ひます。  
それから  
この圖に  
似て居る  
もので吳  
道子筆と

四十六代孫宗壽之家藏、吳道子畫、先君夫子按几坐、從以十弟子者  
とあるのに當る。この像に就て注意すべきことは、その坐り方が日本人と同じ坐り方で、



山東曲阜縣至聖廟孔子像

依ると、この服装は孔子時代のものでなく、漢晋時代のものだと言つて居るが、さうすれば  
少くとも孔子時代より五六百年後の姿であります。



衰冕の像。是は山東曲阜の孔子像がそれでありませぬ。孔子が王者の服を着けて居る像である。孔子が死んでから、その徳を慕ふて尊號を贈りましたが、その追號も後に至るに従ひ段々と位を進めて、唐の玄宗の開元二十七年には文宣王の號を贈つた。而して宋の



山東曲阜至聖廟孔子神像 衰冕像

真宗の大中祥符二年、今より九百年前に、初めて孔子の像を斯う云ふ尤もらしい姿に造つたのであります。宋の真宗の時に上公の制に従ひ、冕九旒、服九章、桓圭を加へた。即ち板のやうなものを頭を載せて、前後にべらべら下つて居る飾りが九本、服の模様を九つにした。其後徽宗の崇寧四年には更に位を進めて、王者に准じて冕十二旒、衰服九章に改め、大觀四年に鎮圭を加へ、金の世宗大定十四年には冕十二旒、衰服十二章と云ふ最上位の服裝になしたのであります。孔子の像に笏を執つた姿のも往々あるの

を見るが、笏は六朝の後周の頃に始めて用ひられたもので、孔子時代には勿論笏無く、圭は長方形の石板の頂を山形に切つたものである。然るにその後明の世宗の嘉靖九年になつて文宣王の王號を取り去つた。その趣意は、孔子は聖人であるけれども人臣である。聖人は上下の區別を喧しく言つて居る。死後と雖之に王號を贈るのは如何なものであらうか、孔子にして若し靈あらば、斯様な非禮は受けられまいとよので、文宣王の追諡を廢しました。元來支那には至る所に孔子廟があります。曲阜にある聖廟は別として、何時の頃から斯く各處に孔子廟が造られたかと云ふと、元の時代からであると思ふ。元の天子は漢民族でありませぬから、漢人懐柔策として、その尊敬する孔子の廟を建てることを奨勵したらしい。さて明の世宗は上述の如き理由で、是等の孔子廟からその衰冕の像を撤去せし



下野國利學校孔子像  
天文三年正月庚申之初日刻四秋八月丁巳



めて、日本の位牌のやうなものを作り、それに名を書いたものと取換へて仕舞つた。然るに今日曲阜の廟にある孔子像は袞冕の像であるが、是は清の雍正元年に再び斯う云ふ風に作つたものであります。

是で大體支那にある孔子の像に就いて述べ盡しましたが、この外に「乗路の圖」と稱し、馬車に乗れる孔子の像がありますけれども、是は極く後世のものであり形も俗なもので、殆ど見るに耐えぬものであります。

日本に於ける現存の孔子像に就て少しく述べて見ると、下野足利學校の孔子像は其下部朽ちたる所の内に、于時侍講筵學徒八百



湯島聖堂孔子像

(中略)天文三正月庚申之日初刻四稔秋八月上丁忌畢と記してあるから、この像は足利末の彫刻であります。一説にはこの像は諸葛孔明の像とも言ひ、閻魔の像だとも維摩の像だ

とも稱せられる。私はよく調査する機会がありませんで、何とも斷言は出来ませぬが、種々の説のあるものであります。湯島の聖堂の孔子像は、寛永九年徳川義直が初め江戸上野の聖堂に置いたもので、其他に顔曾、思孟四子の座像を安置した。猶當時林道春が狩野山樂をして聖賢の像二十一幅を畫かしめたが、元禄三年に湯島に新廟を建てた時に此等の像を同處に遷した。其他幕末には諸藩三十四個所に聖廟がありましたが多分其等の廟には各々孔子の像があつたのであります。湯島聖堂の像は大正十二年の大震災以前に見た事がありますが、禮盤様の臺の上に座して居る像でありました。足利學校にも坐像であります。概して之を言へば、日本の孔子像は、何れも李龍眠或は吳道子作と稱するものが元になつて居るのではないかと考へます。

終りに臨み附け加へて述べます事は、支那では其初め顔淵等十哲の像は立像であつたが、唐の開元八年に司業李元瓘の上言に依り之を坐像に改めた。又孔子を鍍金の銅像に造つたのは、明の天順元年文淵閣に安置したのが最初のもの、様に思はれる。

天順元年置聖像一龕、干文淵閣、像即銅範飾金。誠に淺薄な調べで、何等御参考にはなりませんまいと思ひますが、御依頼に依り清聽を煩はしました。



## 傳教大師と弘法大師

文學博士 辻 善之助

「傳教大師と弘法大師」と云ふ題で暫く御清聴を煩します。私の講演は博物館主催のもので致しましては内容甚だ適しくないのであります。何か藝術関係でもあれば宜しいのであります。その方は甚だ不得手でありますので、止むを得ず斯う言ふ題を出した譯であります。この兩大師を色々の方面から比較して見たいと思ふのであります。で演題に傳教大師を先に出しましたのは、決して上下を着けてある譯ではありませぬ。それは傳教大師が先輩でありますから、そう致しましたのでありますから、左様御承知を願ひます。

先づ經歷を見ますと、傳教大師は稱徳天皇の天平神護二年に生れ、實龜十一年に十五歳で得度せられ、そうして近江の國分寺の僧籍に入られ、延暦四年二十歳で受戒し、同年に叡山に上つて修業を始めました。その間に奈良の大徳を請じて法華經の講演等を行ひました。二十一年に上表して入唐を請ふて之を許され、二十三年七月に出發、二十四

年八月に歸朝して居ります。その經歷は全體から見ても、僧侶としての教育を受けたのみであります。弘法大師の方はどうかと申しますと、年齢は傳教大師より七歳若く、實龜五年に生れて居られる。十二歳で外舅の阿刀大足と言ふ人に就いて漢籍を習つて、十八歳で大學に入つて味酒淨成に就いて毛詩左傳尙書などを學ばれ、岡田博士に就いて春秋を習つて居ります。即ち幼少から漢籍の素養が深かつたのであります。これは傳教大師と違ふ所で、詩文に餘程長じて居られたのであります。延暦十二年に二十歳で出家して、十四年に受戒し、二十三年傳教大師と同年に入唐して、傳教大師の入唐より少し早く五月に出發して、大同元年十月に歸朝しました。しばらくは九州に居つて、翌年大同二年に京都に入り、大同四年までは和泉の横尾山に滞在して居りました。横尾山と云ふのは初め得度した寺であります。

それで、兩大師の長所に就いて考へて見ますと、傳教大師は餘程包容力のあつた方のやうに思はれる。綜合統一の才に富んで居つたやうであります。早く叡山に上つて修業を始めた頃から、起信論疏とか華嚴五教章などを見て、それ等の書物が皆天台が基になつて居ることを知つたので、天台の書物のある所を求めた處がちやうど唐から來た鑑真和尚が持つて來た天台の書物があつたので、それを寫し取りました。そこで從來の奈良の各宗が何れも論で以て宗を立て、居る、即ち中觀論を本にして三論宗が出來て居り、唯識論



を以て法相宗が立つて居ると云ふやうに、論を以て宗を立て、兩宗が互に争つて居る。それを傳教大師は天台の法文を究めた結果、論宗を退けて、經を以て宗を立て、従来の諸宗を包羅總括して、法華經によつて一宗を立てようとしたのであります。延暦十七年法華會を始めて、二十年には、奈良の寺々から十人の大徳を招じて法華經の講演を致して居ります。今までは三論法相が各其長を争つて、それが爲に朝廷に於ても非常に困られました。年分得度者の數も兩者平均に定め、朝廷の御齋會とか維摩會などにも兩宗平均に招請すると云ふやうなことであつた。爲めに多くの人はどの宗が宜しいのか、依る所を失ふと云ふ有様であつた。然るに茲に法華經の講演に依つて、一道の依るべき所を示し、多年の疑が初めて氷釋したといはれる。かくの如く、法華經に依て、總ての宗旨を包んで仕舞ふと云ふのは、傳教大師の偉い所であると思ひます。支那に参りましても、菩薩戒を天台修禪寺の道邃に受け、天台の法を道邃並に佛隴寺の行滿から受け、密教を越州龍興寺の順曉から、禪宗を天台山禪林寺の脩然に受けて居る。斯の如く諸宗を網羅し、以て法華宗の扶翼とした。後世から、印度支那未だ此の盛なるを聞かずと稱せられた所以であります。茲に脩然から禪法を受けたと云ふことは、傳教大師の傳記の中の最も確かなものであると言はれて居る所の、叡山大師傳の中には見えないことであり、多少疑ひを容れる向もあります。その血脈を記しました内證佛法相承血脈譜の古寫本が博物館にあり

まして、原本は弘仁年間に書かれたものでありますが、それに近い時代の寫しであります。其中に脩然から禪法を受けたことが見え、ますから、この事實は確かであらうと思はれます。そう云ふやうな譯で、傳教大師は諸宗を包んで、其教義に於ては包容的であります。それで舊佛敎を總括して、自分の宗旨を立てたのでありますが、愈々宗旨を立て、からは舊宗を排斥して居ります。弘法大師の方はどうかと申しますと、眞言宗と言ふものは當時にあつては非常に新しいものであつたが、實際に當つては、舊來の宗派を手馴づけて仕舞ひ之を包羅して、舊來の寺々をも多く自分の手に收めて居るのであります。傳教大師の方は一本調子で行きました。弘法大師の方は妥協と言ひますか、協調と言ひますか、巧に舊來の僧侶並に寺を自分の手元に收めて仕舞つたのであります。

傳教大師は支那に行かれまして、往復共十三ヶ月であり、ますが、弘法大師の方は二年五ヶ月で弘法大師の方が長く居られました。その爲に新知識を多く取り込んで居り、殊に眞言に通じて居る。そこで弘法大師の新知識を傳教大師は吸収しやうと考へて、弘仁二年に、傳教大師は弘法大師に密敎を傳受して貰ひたいと云ふことを請ふて居る。尙その翌年にも傳受を請ふて、それに對する弘法大師の返事が風信帖の中にあります。九月十一日附の消息は、傳教大師が密敎の傳受を請ふたに對する弘法大師の返書であります。そこで傳教大師は、弘仁三年に自分の弟子圓澄、泰範二人と共に灌頂を受けました。それ



が所謂灌頂記であつて、その時に傳教大師と一緒に灌頂を受けた人々の名前を連ねたもので、弘法大師の自筆であります。斯う云ふ風に、傳教大師は弘法大師に就いて弟子の禮をとり、教へを受けて居る。更にまた泰範をして弘法大師に侍せしめ、尙その翌年弘仁四年には、圓澄を弘法大師の所に遣して、眞言のことを尋ねしめて居ります。その時の傳教大師の消息の文が残つて居ります。斯う云ふ點から見ますと、傳教大師は非常に謙徳に富んだ人で、光をつゝんで、恭謙人に降る、包容の雅量のあつた人のやうに思はれます。傳教大師から弘法大師へ送つた消息の文は幾つも残つて居りますが、その中には求法弟子、或は下資最澄、或は末法弟子、或は受法弟子、或は永世弟子、或は禮謁參謁と云ふやうな言葉がありまして、誠に鄭重なものであります。斯う云ふ風で、兩大師の間柄は、弘仁七年までは可なり親善な關係を續けて居つたのであります。その後二人の間が面白くなくなつたのであります。それは傳教大師が片腕と思つて居りました泰範の取りやりに就いてでありますが、その泰範が傳教大師に背いて弘法大師に従いて仕舞つた。その時に傳教大師から、元へ戻つて呉れと、懇々と屢々頼んでやりましたが、それを拒絶したのであります。その時の返書の文が残つて居りますが、それを弘法大師が代作した。その文は性靈集の中に收めてある。

この弟子の争奪が本になりまして、傳教大師の決意を促し、叡山に於て弟子を養成する

爲の根本の規則になる山家學生式を作り、獨立して大乘戒壇建立の運動を起す導火線となつたのであります。根本的動機ではありますまいが、少くも運動を起した一つの誘因となつたものであります。是からして、傳教大師は山家學生式に依て大乘戒壇を作る運動を起して、僧綱等と衝突いたしました。獨立して戒壇を作りたいと云ふことを請ひました。朝廷では南都の諸寺に之を諮りました所、反對を受けてその運びに至りませぬでした。その論争の結果、傳教大師は顯戒論を撰述して、僧綱を反駁いたしました。その後數年を経ても事は抄らず、その間に終に病に臥したのであります。弘仁十三年二月に、嵯峨天皇は宸筆を以て、傳教大師に傳燈大法師位と云ふ位を授けられました。それ迄は僅かに傳燈法師位と云ふ軽い位を授けられて居つただけであります。その前後の事情は、一心戒文と云ふものに出て居るのであります。僧綱達が傳教大師を憎みまして、その爲めに、この位の如きも嵯峨天皇に傳達しなかつた様子が見えるのであります。そこで弟子の光定は、そのことを歸依者の藤原冬嗣に相談いたしました。冬嗣は事情を知らないものですから、それは僧綱から傳達すれば宜しいのであると申しました。所が、光定は僧綱が傳教大師を憎んで傳達しないのであると云ふことを申しましたので、そこで冬嗣から直接に申上げて、大法師位の宸筆位記が嵯峨天皇から下された譯であります。弘仁十三年には傳教大師の病が段々重くなりまして、四月には遺言をのこし、六月四



日に入滅になりました。それから七日立ちまして、六月十一日に生前兼ねての上表の旨に従ひ、大乘戒壇を立てることを許されて、その希望を達したのであります。

傳教大師が僧綱等と衝突したのに反して、弘法大師は僧綱等とは極めて親密であつて、如才なかつたやうであります。弘仁五年閏七月には、元興寺僧中環の爲めに、その罪を赦されんことを請ふといふ上表文を草して居ります。この中環といふのは僧綱護命僧正の弟子らしいのであります。この上表を草した事は、弘法大師と護命僧正の關係が一通りでなかつた事を示すものであります。位の如きも、弘法大師は傳教大師より年齢も戒臘も若いに拘らず、早く弘仁十一年に傳燈大法師位を授けられて居る。傳教大師より二年早いのです。天長元年に少僧都になり、七年には大僧都に迄昇つて居ります。天長四年には護命が僧正に任ぜられましたが間もなく、弘法大師は護命をして、自分の預つて居る東寺の法務を兼ねしめて居ります。天長六年には、弘法大師は中繼と云ふ人の代りに護命僧正の八十の賀の詩並序を作つて居ります。この中繼は前に申した中環その人であらうといふ説があります。かういふ點から見ても、弘法大師の僧綱に對するやり方は頗る巧であります。

弘仁七年に、弘法大師は朝廷に上表して、高野山に入定の地を請ひ許されて高野山に入ります。さうして傳教大師が京都に於て活躍して居ります間は高野に籠つて居りました。

て、傳教大師と僧綱の争を傍觀して居りましたが、弘仁十三年に傳教大師が入滅になりました。その翌年京都に出て來て東寺に住することになります。東寺は桓武天皇の御代に造營し始めて弘仁の時代は造營中であつたのであります。弘仁十四年正月に弘法大師は勅命に依て東寺を預ることになりました。この當時は、高野の地は天野明神の地でありましたが、延暦二十四年に、朝廷から聽福と云ふ僧を遣されて、三重の塔を建て、天皇の聖壽を祈らしめたと云ふことがある。それは日本後紀に見えますが、神社に塔を建てること云ふことは、神が佛教の供養を受けることを喜ぶと云ふ思想であつて、かういふ思想が、その時代にあつたのであります。そう云ふ譯で、延暦の時代に早く此地は天野明神の地として開けて居つたのであります。弘法大師は早くから之に目を着けて、その地を賜らむことを請ひました。この地に寺を建て、上は國家の御爲め下は諸修行者の爲めに一院を建立したいと云ふことで、當局の間に奔走して、布施助と云ふ人に書を與へて、このことを頼んで居ることがあります。遂に之を賜りまして、承和元年の頃には寺が出来たやうであります。斯様な譯で、天野明神の土地は遂に金剛峯寺となつて仕舞つた。尙また東寺を造營して居ります中に、それに使ふ材木を東山の稻荷神社の神木の中に見着けて、それを運ばせて、その材木を引きます爲に、太政官の役人達に力を合せて貰ひたいと云ふことを請ふ文章が性靈集にあります。この稻荷の神木を伐つた爲に、その祟りで天皇が



病氣になられると云ふのでありますが、この時代から稻荷が遂に東寺の鎮守になつて仕舞ふのであります。斯う云ふ風に神社との關係を着けることは弘法大師は中々上手であつたのであります。尤もこの點に就いては傳教大師にも事蹟があるのであります。日吉神社の地であつた叡山に寺を建て、土地を占領すると云ふ事實もありましたが、弘法大師の方が巧かつたやうであります。

尙弘法大師は多くの寺を占有しました。奈良東大寺も弘法大師の手に入りました。弘仁元年に東大寺の別當になつたと云ふことが弘法大師の年譜に見えますけれども、この年は餘り確ではないと思ひます。併し、この後弘仁十三年に東大寺に眞言院を建て、灌頂の道場としたと云ふことが類聚三代格に見えますから、是は確かなことでありませう。少くも弘仁の末頃には、東大寺に密教が入つたと云ふ明かな證據があるのであります。承和年間には弘法大師の弟子の實惠が住して居りますから、この頃には立派に眞言宗のものになつて仕舞つた。それから大安寺も弘法大師の年譜に依つて見ますと、天長六年に大師がその別當に任ぜられて居る。飛鳥の川原寺、六波羅の珍皇寺、それから高雄の神護寺、大和の室生寺なども、弘法大師の書き残した遺告に依つて見ますと、是等の寺々も大師の管理になつて居ります。斯う云ふ風に弘法大師の宗旨は從來の宗旨と違つたものを立てたのでありますが、古い寺を自分の手に納めて仕舞つた。その點は傳教大師

とは大に違ふ所であります。

次に著述に就いて見ますと、本朝高僧傳には傳教大師の著作は百六十餘卷、弘法大師は二百二十卷とあつて、この數はどこから出たか分りませぬが、兩大師とも今日は全集が出来て居ります。併し是は眞偽混淆して居りました。どれだけが確かで、どれだけが偽作であるかと云ふことは容易に決められないやうに思ひます。それが決まりました。書物の數で値打ちは決まりませぬ。内容に就いて見ると、弘法大師は多種多様で變化が多いが、傳教大師は單純で教義に關するもののみであります。弘法大師は極めて方面の廣い多藝の人でありました。文才に長けた人で、性靈集十卷を初めとし、文鏡秘府論その他文章に關するものが非常に澤山ある。三教指歸、是は儒佛道の三教を打つて一丸としたものであります。之に依つても弘法大師の多方面であることがよく現れて居る。この三教指歸とよく似たものに豐誓指歸と云ふもので、延暦十六年に出來たものがあります。その弘法大師自筆本と稱するものが高野山にあります。是は大師の自筆であるかどうかと云ふことは色々議論がありまして、決め兼ねるのであります。私は大師の若い時の書であらうと思ひます。次に弘法大師の多方面のことを示すのに、綜藝種智院があります。即ちその當時の民衆學校でありまして、その學校の規則として書かれた綜藝種智院式といふものがあります。その大師自筆本と稱するものが今上杉神社に傳つて居



ります。併し是は眞筆ではないやうであります。大師が自分で書いたものとしては解釋の出来ない文字が澤山ありまして、是は眞筆ではないと思ひます。これによつて見ますと、弘法大師は平民の爲、民衆教育の爲に學校を建てたのですが之を以ても宗教だけでなく、さう云ふ方面にも手を伸ばさうとしたことが分る。

次に弘法大師には、五十音圖及びいろは歌を作つたと云ふ説があります。是については、五十音圖を作つたと云ふ事の誤りであることは、餘り辯ずる必要はないかと思ひます。それは専門家の間には可なり詳細なる研究があるやうであります。いろは歌は弘法大師が作つた、いやさうでないといふ説がありますが、大師の作に非ずと云ふ説が有力のやうに思はれます。尤も之に就いては相當に反對の説もありますけれども、反對説は受身であり消極的であるやうに思はれます。大師の作に非ずと云ふ方が強いやうに考へられるのであります。それから尙弘法大師は繪を畫いた、或は彫刻をしたと云ふやうな説もあります。是はずつと古く明治四十年前後に、平子鐸嶺君が國民新聞の上で、弘法大師不畫不彫辯と云ふ説を出して、眞言の方の富田數純師との間に争ひがあつたのであります。それから續いて、新佛教「歴史地理」などの上に於ても平子君は説を出して居りました。その説で見ますと、平子君の方に強味があるやうであります。併し富田數純師の方にも一分の道理があるやうに思はれる。それは眞言の曼陀羅などを寫すのには幾らか繪

心のない者には出来ない、阿闍梨には繪を畫く人が多いのであると云ふ所から出發して居りますが、平子君の言はれるやうに、非常な偉い畫家彫刻家でなくとも、多少の繪心はあつたのかとも思はれるやうであります。傳教大師の方にはそれ程のこともないやうでありまして、一本調子の單純な人で、繪だの彫刻の技をしたといふことは、傳説にもないやうに思はれます。

それから次に嵯峨天皇との關係に就いて見ます。嵯峨天皇と傳教大師との關係は非常に深かつたやうに思はれます。是は特に宗旨の上に於いて御信任が厚かつたやうであります。即ち先刻申しましたやうに、傳燈大法師位の位を宸筆で以て直接に賜つたことも、之を示す一つの證據にならうかと思ひます。それから傳教大師入滅後、七日の後に大乘戒壇を許可せられた。是も天皇直々の勅命であつたのであります。さうでないといふ當局者は絶対に反對して居つたのですから、普通に行つては許されなかつたのであります。それから亡くなりましてから後に、嵯峨天皇が之を悼んで、哭澄上人と云ふ御製の詩を賜つて居ります。それは青蓮院に傳つて居ります。畫象の讚にあるのはその文句を寫したものであります。青蓮院に傳つた居るものが宸筆であるかどうかと云ふことに就いては多少議論もあるのであります。今それを申して居る暇はありませんから略して置きます。傳教大師寂後に戒壇が出来て、弘仁十四年四月十四日に始めて授戒のこと



がありました。その時に戒を受けました者は十四人あつた。その十四人の中に光定が居ります。光定と云ふ人は傳教大師の爲に實に献身的に働いた人でありまして、その書きました一心戒文を見ますと、誠に感動すべきものがあります。光定は大乗戒壇設立に就いては大功があつたのでありまして、その戒を始めて受けました時に、嵯峨天皇から親しく宸筆を以て戒牒を書いて賜つたのであります。そのことは光定自ら一心戒文の中に書いて居りますが、それは光定の功勞を賞せられたことであらうと思ひます。詰り引いては傳教大師の徳を慕はれたからであらうと思ふ。その宸筆の戒牒が今叡山の山の上に藏されて居りまして、昔は勅封と云ふことになつて居りまして、今も勅封の形式を以てゐて、容易に拜見出来なかつたのであります。大正十年に開封がありまして、その時に特に許されて拜見しました。是は嵯峨天皇の宸筆として最も確かなものであります。それは光定の一心戒文の文に依て證明することが出来る。のみならず、北白川宮に智證大師戒牒があります。それに別當藤原三守と云ふ人の署名があります。その署名は光定戒牒の署名と同じであります。是によつてもその確かであることを證明するものであります。

嵯峨天皇と弘法大師との間はどうかと申しますと、是は宗旨の上の關係と云ふよりは、寧ろ書道及び詩文等の上に於いて大師は厚い寵を受けて居つたかと思はれるのであります。弘法大師と嵯峨天皇との關係は大同四年から始まります。大師は支那から歸朝して後、大同四年に入京しましたが、その頃から天皇とは詩文書道に於いて、特に意氣相投するものがあつたやうであります。性靈集を見ますと、文の方面に於いて殊に深い關係が見られる。弘仁二年十一月十四日には嵯峨天皇の御爲に玄賓と云ふ人に送る所の勅書を作つて居ります。同年には支那の詩人の書を寫して献じて居ります。即ち劉希夷の書を始めとしてその他幾人かの書を献じて居る。弘仁三年には狸毛筆を献じて居り、それを献ずる文は性靈集の中にあり、その自筆下書きは醍醐三寶院に傳つて居ります。同三年七月には雜文と云ふものを献じて居る。五年三月には米及綿を賜つたに就いて、それを謝する所の詩を奉つて居る。同年閏七月には勅を奉じて梵文並に雜文十卷を献じ、同八月には五彩の吳綾錦の縁のある屏風に古人詩人の有名なる句を記して、之を献ずる所の表並に詩があります。斯う云ふ風に書道或は詩文の上には、天皇の寵を受けて居る事蹟が現れて居る。嵯峨天皇も書道に長じて居られたことは有名であり、弘法大師も書に巧みでありましたから、この點に於て深い關係があつたやうに思はれるのであります。

書に就いて申しますと、弘法大師が書に巧みであつたことは、支那に居つた頃から有名でありまして、歸朝するに當つても、唐の文人が詩を賦して訣別を致して居ります。その



言葉の中に梵書を能くし八體に巧みなりとある。後世の傳説であります。五筆和尚と云ふやうな名さへついで居る程で今日残つて居るものを見ましても、書道に於て神聖視せられただけあつて、立派なものであります。併ながら、書に就いてはそれぞれ主觀的な好みがあつて、私は餘り好まないものであります。それは筆力が何と申しますか、強靱と言ひますか、非常に粘り強い所がある。變化には富んで居りますが、多少の嫌や味があるやうに思ふ。霸氣が多く、しつこくて、油氣つて居る様子が見える。狸毛筆を献ずる表は淡さりして居りますが、風信帖、灌頂記、醍醐の三寶院にある大日經解題、三十帖策子、東寺の七祖讚などを見ますと、變化はありますけれども嫌や味が多いやうに思はれる。傳教大師の書はどうであるかと言ふと、是は私は非常に好きであります。是は主觀的のことであり、ますから、宜い悪いと云ふことは別であります。横濱の原富太郎氏所藏の消息、それから叡山にある傳教大師の請來目錄、天台法華宗年分緣起、それから羯摩金剛目錄と云ふものがあります。それ等が今知られて居る所の傳教大師の自筆であります。尙その外に東寺に現在所藏してある所の弘法大師の請來目錄と云ふものがあります。是は寺では弘法大師の書と言つて居りますが、是は何人も一致して弘法大師の書でないと思つてあります。傳教大師の書であると云ふことに、多くの人が一致して居るのであります。是は私の想像するには、曾つて傳教大師が弘法大師からそれを借りて、そうして自分の研

究の爲に寫して置かれたものであらうと思ふ。卷物の裏に比叡の印がありますが、寺では兩大師が請來目錄を交換して置いて、後で取換したものであると言つて居りました。そのことは卷物の終りに、松崎謙堂が會つて比叡山に行つて傳教大師の請來目錄を見て記した文があります。その文に依ると、兩大師が前後して支那に入り、その請來して來た所の目錄を互ひに貸し合つて二人共亡くなつた。請來目錄はそのまゝ寺に止つて、弘法大師のは叡山に止り、傳教大師のものは東寺に止つて、後數百年して取戻したものである。そこで叡山にもとあつた弘法大師の請來目錄に比叡の印があるのだと書いてある。併し是は誤りだらうと思ひます。東寺に比叡の印のあるものがあるので、解釋に苦んで斯う云ふことを言ひ出したものだらうと思ふ。是はもともと叡山にあるべき筈のもので、傳教大師が弘法大師のを寫したものだらうと思ひます。是等の書を見ますと、傳教大師の人品の窺れるもので、非常に氣品のある温雅な書風でありまして、清韻に富み人品の高潔なることを感ずるやうに思ふのであります。

それで、傳教大師が弘法大師の目錄を寫して置いたと云ふやうなことも、その性質の一つの現れで、傳教大師は氣品の高かつた人であり、徳に於て優つて居つた人でありました。宗教界に於て専ら働かれ、言換れば學究的で一本調子の純淨の人のやうに思はれる。弘法大師は機略に富んだ人であつて、才に於て優り、多藝多方面で世間的才能に長じて居つ



た方のやうに思はれます。之をその遺跡に就いて見ましても、叡山と高野山とを比べて見ても、叡山は都會に近く都會の塵に染みさうなものでありますが、却つて世間を離れて奥山に籠つたやうな感じのする所であつて、優雅な淨い感じがするのであります。高野山は都會よりずつと離れて居りまして、深山にありながら、却つて世間的の香があるのであります。是一面に於て兩大師の性格を反映したものでなからうかと思ふのであります。

次に肖像に就いて見ますと、傳教大師の肖像には悠揚として迫らず、純淨の様子が見えるのであります。併し是は本當の顔を寫したものでなからう、想像で理想的に畫いたものではなからうかと云ふ説がありますが、人柄はよく現れて居ると思ふ。もう一つは出羽の立石寺に傳つて居る所の木像でありますが、多少寫生風のもので、如何にも凄いやうな容貌でありまして、私共傳教大師の性格から考へて、斯う云ふ容貌とは思はれないのであります。何れにしても、傳教大師の容貌は、普通世間に傳はる畫像のやうなものが眞を傳へて居るのではないかと思ふ。是はたとへ本當の寫生でない理想的なものとしても、斯う云ふ様子の方であつたらうと思ふ。弘法大師の方は世間に幾つも傳つて居りまして、皆それぞれ多少の相違はありますが、大體は同じであります。何れも才氣煥發の様子が見えて居ります。

是で兩大師の直接の比較は終りましたので、次に兩大師が亡くなつてから後の経緯に就いて比較して見ます。

その弟子に就いて見ますと、弘法大師の方は、一時大いに榮え、官位も著しく上つて居ります。是は弘法大師在世中から官邊の受けがよかつたからでありましょう。東寺に居りました實惠は、弘法大師入滅の翌承和三年權律師になり、承和五年には正律師七年には少僧都に上つて居ります。それから眞濟は承和十年權律師になり、十四年には正律師になり、仁壽元年には少僧都になり、三年には大僧都になり、齊衡三年には僧正に上つて居ります。是は眞言宗に於て僧正になつた初めてであります。それから眞雅は嘉祥元年には權律師になり、同年正律師に上り、仁壽二年には少僧都になり、齊衡三年に大僧都になり、貞觀六年に僧正になつて居ります。斯う云ふ風に眞言の方は非常に榮えたのであります。傳教大師の弟子はどうかと申しますと、慈覺大師の如き人でさへ、嘉祥元年に僅かに大法師位を授けられただけであります。その外に官位の經歷は見えませぬ。智證大師の方は元慶七年に漸く法橋和尚位になり、續いて同年法眼和尚位になり、寛平二年に少僧都になつて、その翌年死んで居ります。官位の榮達の方から申しますと、眞言の方が遙かに優れて居るが、天台の方は一向振ひませぬ。是は矢張り兩大師在世中の影響が其處まで現れて居るやうであります。



兩大師が亡くなりまして後、天台眞言兩宗盛んに競争を始めるのであります。地方への普及について、承和二年十月に天台の義眞の奏上に依つて、地方に天台の講師讀師を出して、天台宗を傳へるといふことになりましたが、このことは傳教大師の山家學生式の中に書いて居ることでありまして、或る意味に於きまして、傳教大師の遺告であると言つても宜しいのであります。地方講師讀師は國分寺に於いて傳道に従事するのでありまして之に依つて地方へ天台宗を廣めると云ふことになるのであります。それから二年立ちまして、承和四年には眞言宗が天台の向ふを張りまして、諸國講師として眞言の僧侶を送ることにになりました。それから兩宗競争の形になりました。元慶五年には天台眞言兩宗年々順番を定めて諸國講師に補任せしむることになりました。是は兩宗のものが互ひに喧嘩を致しましたからで、喧嘩と云ふ言葉がその時の公文に出て居ります。是から兩宗がどんだん地方へ廣まりました。そうしてそれぞれ地方に別院が出来たのであります。即ち承和三年三月には山城の願安寺が眞言の別院になり、同年正月には伊勢桑名の多度大神宮寺が天台の別院になつたのを始めとして、兩宗競うて地方に多くの別院を有つやうになります。天長元年には義眞が天台の座主になりましたが、眞言の方では、之に對して承和二年三月に高野山の金剛峯寺が定額に列せられて、朝廷の僧綱の管轄を離れて獨立するのであります。年分度者に就いても承和十五年に慈覺大師が新たに歸

朝しましてから、叡山に從來置いてありました二人の年分度者の外に、新たに二人を加へついでまた二人を加へて六人とした。之に對して眞言の方では、弘法大師の時に三人の度者がありましたのを、仁壽三年に奏請して、更に三人を加へて六人に致しました。斯う云ふ風に度者のことに就いても兩宗互ひに争つて居ります。そこで眞言の方でも天台と同じやうになりましたので、天台の方では、清和天皇の貞觀元年に奏請して、度者二人を加へ、仁和三年に更に又度者二人を加へました。斯様に兩宗互ひに消長がありました。宗内の人物に於きましては、天台の方が何れかと言へば盛んであつたやうであります。眞言の方では、弘法大師が亡くなりまして間もなく、承和三年に眞濟眞然の二人が入唐を請ひ許されて出發しましたが、難船して僅かに死を免れて歸りました。是が入唐出來なかつたと云ふことが、眞言宗にとつては可なり大きな打撃であつたやうでありまして、清和天皇の時代には眞言の方には餘り人物が出て居りませぬ。貞觀六年に傳教大師及弘法大師に法印大和尚位を贈られ、八年には傳教大師に大師の諡を贈られましたが、弘法大師の方は、その後長く大師號が贈られませぬで、延喜の時代まで待たなければならなかつた。この大師號のことに依つても、兩宗の消長が察せられるのであります。清和天皇の前後には天台には智證、慈覺の兩大師が出まして、天台獨り盛んでありましたが、是は恐らく傳教大師が山家學生式に於いて、十二箇年の間山を下らず修行すべしといふ規則を定



めた、その効力がこの時に現れたものであらうと思はれる。

さて眞言宗の方に於きましては、東寺と高野山と二つの中心がありました。是は弘法大師の遺告に依つて見ますと、東寺は根本道場と云ふ意味で、高野山は大師入定の地と云ふことであつたのでありますが、歳を経る間に様子が變つて、兩方で勢力争ひをすることゝなつた。その勢力争ひは年分度者のことに於いて現れたのであります。先刻申しましたやうに、弘法大師の時に三人度者がありました、その後、三人の度者は年々高野山に於いて課試を致し、それから後に得度を致すのであります。試及び度を高野山に於いてやつて居る。所が仁壽三年に度者三人を加へて六人になつたのであります、この時から東寺に於いて課試することになり、得度は三人は高野でやり、三人は高雄に於いてやることになりました。然るに高野山と云ふ所は、今日でもあれだけの所でありまして、昔は中々山奥深く容易に行けないので、高野に於いて度せられる所は奥深く山へ入るのに大變難儀をすると云ふ理由で、仁壽三年から之を東寺で度することにしたのであります。高野に於いて度さないで、東寺に於いて試し且度すと云ふことになつた。その爲に金剛峯寺高野山の道場は閑として人稀なりといふ有様になりました。そこで元慶六年に高野山に居りました眞然から申立てまして、學業の優れた品行の正しい者を、高野山から選んで東寺に送つて試験をする、それは高野の人ばかりを採り、外の寺の者は採らないと云

ふことになつた。即ち年分六人皆高野の人を取ることゝした、所がその後間もなく又眞然から奏請して、東寺に於いて試験することを止して、試も度も總て高野に於いてやると云ふことになつた。但しその人を選ぶのは、高野山ばかりでなく、宗内全體の人から選ぶと云ふことになつた。是は眞然が高野に居りまして、その勢ひが盛んであつたことを示して居るのであります。然るに之に對して、外の寺から不平が出たのでありましようか、仁和五年になりまして、高野に於いては高野の分のみを試及度することになり、宇多天皇の寛平七年には高雄の神護寺の分は高雄に於いて試及度すると云ふことになつた。斯う云ふ譯で、東寺は元慶八年以後は全く年分度者のことに預らないことになりました。非常に勢力が劣つて來たのであります。それで寛平九年に、東寺に居りました益信が上奏いたしました、東寺は根本道場であるのに、度者を試することもなく、度することもないが、是は甚だ宜しくないから、之を元通り戻して貰ひたいと云ふことを願出ましたので、その後東寺に於いて試験を致した上で、三人は高野へ送り、三人は高雄に送ると云ふことになつたのであります。斯の如く度者のことに就いて、仁壽から寛平に至るまで、宗内で争つて居つたのであります。この後宗内の勢力争ひは尙續くのであります、東寺には觀賢が出て参りまして、非常に勢力が加はつた。この人の時に喧しい三十帖策子の問題が起つたのであります。それは弘法大師が入唐して傳授を受けた所の法文儀軌を寫した



ものでありまして、それは弘法大師の自筆と橋逸勢の自筆とが混つて居ると云ふことであります。それは大師の寂後はその弟子の中一番上席の者が保管することになつて居つて、實惠から眞濟に傳へて長く東寺に納めて、門外不出でありました。然るに貞觀十八年に眞然が高野に居りまして勢力があつたものですから高野山に持つて行きましたが、その時に眞雅が是は東寺から外へ持ち出たはならぬものであると堅く反抗いたしましたので、一度は東寺に戻りましたけれども、眞雅が死んでからは又高野山に持つて行かれました。高野山の言分では之を京都に置くことと火事の怖れがあるし、高野山に置く方が安全であるからであると辯護して居ります。それでその後長く東寺に返さなかつた。それから高野では壽長より無空に傳りました。所が觀賢の時になりまして、延喜十五年に觀賢は之を宇多法皇に訴へ、宇多法皇から宣旨を以て、無空を責められた。無空は三十帖策子を持つて出奔しまして、山城の何處かに隠れて仕舞ひました。そこで醍醐天皇が觀賢に命じてそれを捜さしめられ、延喜十八年に無空が死にましたので、その弟子から漸く東寺に戻さしめたのであります。延喜十八年二月東寺に戻り、三月醍醐天皇之を天覽あらせられ、その後は眞言宗の長者阿闍梨が之を保護するやうにと云ふことで、今日まで傳り、それが國寶となつて居るのであります。現在は仁和寺にあります。それは鎌倉の初期に仁和寺に居られました守覺法親王が東寺から借出しまして、その儘になつて仕舞つた

のであります。この觀賢が居りました頃が東寺の全盛時代であつた。觀賢は高野山の座主も兼ねましたので、それ以來高野山の座主は東寺長者が兼ねることになりました。そこで高野との喧嘩はなくなりましたが、その代り高野は非常に衰微を致しました。一時は奥院の弘法大師の廟さへ芒々と草が生え茂り、所在が分らなくなりました。三條天皇の御代に祈親上人が山に登り復興しましたが、苔草に火を着けて、火の止つた所を以て廟の所在を知つたと云ふ程であつた。斯う云ふ風に、東寺と高野山と中心が二つに分れて居りました爲に、兩方相争つて高野山が衰微すると云ふことになつたのであります。天台の方に於いても、慈覺大師の門流と智證大師の門流との争ひがあるにはありましたが、けれども、叡山に於ては良源慈惠大師が出て、よく一山の基礎を固め、三井寺の智證大師門流の方が勢力が劣つて居りましたから、長く叡山中心主義で繁榮いたしました。是は傳教大師が叡山中心主義で一本調子で行かれたからであります。

次に後世に對する影響に就いて申しますと、天台の方からは淨土教が出て、非常に發展を致し、その後世に及ぼした影響は今更申す迄もないことであります。淨土教に依つて穩かな優美な感情、宗教的情操を涵養したことは殊に著しいものがあります。殊にそれは藝術の上に多く現れて居るやうに思はれるのであります。淨土教の藝術、例へば二十五菩薩來迎圖の如きは、温かい和かな愉快な感じがするのであります。密教のものになり



ますと、總てが形式化して居りましたして、纖麗ではありますけれども、餘裕のない窮蹙な感じが致します。天台の方からは尙榮西禪師が出るとか、法然上人に續いて親鸞上人が出、又日蓮上人が出るなど、鎌倉時代に於ける新宗の搖籃地は叡山にあつたのであります。その後世に於ける影響は實に大なるものがあります。眞言の方に於きましては、平安時代に於いて祈禱の流行を致した。是は密教が本になつて居るやうであります。祈禱のことは弘法大師の頃から、既に行はれて居るのであります。弘法大師は天長元年に少僧都に任ぜられて居りますが、是は雨を祈つた功であります。弘法大師が西寺の守敏と雨の祈りに就いて争つて勝つたと云ふ傳説があります。是は事實あつたかどうか分りませぬが、可なり古くから行はれて居る傳説であります。又弘法大師が神泉苑に雨を祈つた時に使はれたと云ふ劔が、今高野山の龍光院にあります。果してその時のものであるかどうか分りませぬが、平安朝のものであることは確かであります。祈禱と云ふことは平安時代の佛教の特色でありましたが、また一面からは、その弊害を示すものであります。それは密教がその本を爲して居るのであります。尙又平安時代の文化は一般に形式化したのであります。その爲に平安朝の文化が固定し停滯して發達が止まつて仕舞つて、その崩壞の原因となつたのであります。それは今精しく申して居る暇はありませぬけれども、門閥の弊は殊に著しいものがあります。政治上に於ける閥が盛んであつ

たことは申す迄もなく、其他の方面に於いても、家々に世襲があり、學問でも藝術でも、専門の閥を生じ、家々に於いて家傳家學があり、秘密を尙ぶやうになつたのであります。是は一面に於いてその家の家傳に練熟すると云ふ特徴もありますけれども、徒らに舊慣を墨守して、その發達を阻害すると云ふ弊があるのであります。その爲に文化が腐敗して來るのであります。是はその時代に一般の文化が形式化したことより起つたことであります。それが、それは密教の影響を受けたことが大なる原因であらうと思ひます。家道、家傳の秘密を嚴にするのは密教に於ける眞言秘密の灌頂に依つて容易く人に傳へない、嫡々相承と云ふ風が外の社會にも影響したが爲であらうと思はれる。歌道、書道の如きものに於いても亦傳授のことを灌頂と申します。灌頂と云ふ言葉は元は密教から出た言葉であります。その秘密相傳といふことが、その道の發達を止め、爲めに、可なり弊害が多かつたやうに思ふのであります。それは特に弘法大師にその本を歸すると云ふ譯ではありませぬが、當時に於ける密教の影響が大なるものがあつたやうであります。尙傳教大師と弘法大師の比較に就きましては、まだ残された問題がありますが、殊に教義の方面に就いては私は門外でありますので、今日はこの位の所でこの講演を終りたいと思ひます。



昭和八年十一月一日印刷  
昭和八年十一月四日發行

【定價金貳拾五錢】

### 皇室博物館發行

印刷者 杉田彌太郎  
東京市麹町區麹町八丁目一番地

印刷所 杉田屋印刷所



東京帝室博物館講演集既刊目錄

第一册 (定價金五拾錢)

壁畫の盛衰  
文化史より見たる西蜀  
上下の起原及變遷  
文學博士 瀧 精一  
帝室博物館鑑査官 中 川 忠 順  
高 橋 健 自

第三册 (定價金五拾錢)

佛教美術に於ける印度と支那との關係  
一切經刊行以前の一切經に就いて  
文學博士 大 村 西 崖  
高 楠 順 次 郎

第四册 (定價金五拾錢)

美術と服飾との關係に就いて  
上古の服飾  
奈良時代及平安前期の服飾  
帝室博物館鑑査官 溝 口 禎 次 郎  
文學博士 高 橋 健 自  
同 關 根 正 直

第五册 (定價金參拾錢)

歐洲學者の東方探險  
東洋最古代の女人畫に就いて  
文學博士 瀧 精 一  
同 松 本 亦 太 郎

第七册 (定價金貳拾五錢)

東洋畫に就いて  
支那畫の二大潮流  
桃山時代障屏畫の陳列に就いて  
浮世草子を通じて見たる浮世繪  
中華民國特命全權公使 汪 榮 寶  
文學博士 瀧 精 一  
帝室博物館鑑査官 溝 口 禎 次 郎  
文家博士 笹 川 種 郎

第九册 (定價金貳拾五錢)

日本刀の造り方  
古鏡の圖文に就いて  
工學博士 俵 國 一  
帝室博物館學藝委員 原 田 淑 人

第十一册 (定價金五拾五錢)

上古時代の住宅  
埴輪に關する二三の考察  
帝室博物館鑑査官 後 藤 守 一  
文學博士 濱 田 耕 作



14.5  
139



終